



月のヒカリ

I

著：モカ

絵：Nanaha



Konoha Hikari  
木ノ葉 ヒカリ

高校2年生になったばかりで、性格は真面目で明るい性格、弓道が得意。

2年前父親が再婚し家族が増え今は両親と兄との4人暮らしだがヒカリは家族に馴染めずいつも孤独を感じている。

学校の弓道場で矢を放ったさいに不思議な光に導かれ異世界セブンズドアに迷い込む。



Getuka  
月下

髪の色は黒で少し幼さが残る顔に緋色の瞳がとても印象的な龍神人の青年。

闇を抑える不思議な力を持っている。

ヒカリの前では冷たく接しているがいつも気に掛けている。



Zin  
ジン

とても元気で明るい少年。

ラオスの兵士で、ユーリスとの国境を監視する城の副官をしている。ある事件を切っ掛けにヒカりに命を救われヒカリと行動を共にすることに・・・。

## プロローグ

---

彼女は、学校終わりの校庭を憂鬱な顔で歩いていた。  
そこに背後から彼女を呼ぶ声が聞こえてくる。

「おい！ヒカリ。今日も部活休むきか！？」

彼女が振り向くとそこには、ヒカリと同じ学校指定の制服を着た男子生徒が立っていた。

彼は、夜月 隼人（ヤヅキ ハヤト）  
ヒカリが所属している弓道部の先輩だった。  
背が高く体つきはがっちりしていて髪はいつも無雑作に頭の後ろに束ねられている。  
顔つきは和製の王子様といった感じだ。  
性格は優しく後輩にもとても人気があつた、部活の指導のさいには厳しい一面もあつたが後輩たちはそのギャップがいいといつも騒いでいた。

『夜月先輩！！』

ヒカリは心の中で呟いた。何故だか声は出なかった。  
ヒカリは夜月の顔をまともに見ることが出来ず少し目線を落としていた。

「先輩じゃないお兄ちゃんだ。いつも言ってるだろう。まあいい、どうして最近こないんだ？入った当初は熱心だったじゃないか」

夜月は心配そうにヒカリを見ながら言った。  
そんな夜月の気持ちをヒカリは知っていたがどうしても素直になれないでいた。

「いいでしょ、ほっといて先輩には関係ないです！！」

強い口調で言うと裏門がある体育館裏に走って行ってしまふ。

「おいヒカリ！！先輩じゃなくてお兄ちゃんだって  
は一、まいったなあ」

ヒカリは、体育館裏に着くと走るのをやめトボトボと歩き出した。

『今日は、どうしようかなあ？家に帰っても退屈だしなあかといって弓道場には行きたくないし……。』

彼女の名前は木ノ葉 ヒカリ（コノハ ヒカリ）

高校2年生になったばかり、背格好は中肉中背、髪は黒髪で肩にかかるくらい黒いしなやかな髪はヒカリのお気に入りだった。

性格は、真面目で明るい性格だが、もともとあまり前に出るタイプでなかったためクラスではあまり目立たない存在だった。

とり得といったら人より少し弓道がうまいことぐらいだ。

2年前父親が再婚し家族が増えた、両親と兄との4人暮らしだ。

ヒカリにとって夜月は兄であり同じ部活の先輩だった。

『あっ雨。きゃ、かなり降って来た……。』

近くにある体育館裏の屋根の下に逃げ込む。

『これで部活も中止ね』

部活を休むのは心苦しかった、部内でもヒカリはトップクラスの選手で先生から期待されていたからだ。

期待を裏切るよくうでいつも心がキリキリする部活がやっている時間はとても息苦しい時間だった。

『お兄ちゃんか……。』

ヒカリは膝をかかえ座りこんだ、そこえ渡り廊下を歩く人影が夜月と同じ部の女性部員が楽しそうに会話をしながら歩いている。

ヒカリはその光景を見てため息をつく。

『なんで私じゃないの？なんでお兄ちゃんなの？私の方が前から先輩のこと好きだったのに、先輩は私のこと妹としか見てくれない、私の先輩に近づかないで！！』

ヒカリは膝に顔を埋めた、自然と悔しくて涙がホロホロ落ちてきてほほを濡らす。

何時間そこにそうしていただろう、夕日が沈みかけ雨がやんでいる。

ヒカリは、立ち上がった。

なんだかとてもムシャクシャし、このまま家に帰る気になれなかった。

『こうゆう時は無心になれる弓道が一番だ！！』

幸い雨のおかげで部活は休み、夜月にも部員にも、今なら会わなくてすむ。

ヒカリは部室のロッカールームに行き道具を取り出し、制服のまま弓を持ち的の前にたった。

『この感覚久しぶりだ！！』

久しぶりのせいか体がなまっていて弓を引いているだけで腕の筋肉が軋む、ヒカリの手から矢が離され的をめぐらして風を切る。

ドン

と音を立て的に矢が刺さる、的の中央に刺さらず的の外側に刺さっている。

ヒカリは大きく息をすった。

『集中しろ何も考えるな・・・』

もっと正確にもっと力強く前を見てヒカリ！！』

ヒカリは自分に言い聞かせた。

『先輩！！なんで私じゃだめなの！？』

先輩、先生、部員のみんなを裏切って私しなにしているの?? どんどんこの世界から私が消えていく、もうこんな気持ちになるならこんな世界から消えてなくなりたい！！』

そう思い矢を放った瞬間だった、急にヒカリの胸の辺りから光が現れヒカリを包み込む。

『何！！??』

そのままヒカりは光と共に消えてしまった、残ったのは的の中央から大きくズレて刺さっている矢だけだった。

## セブンズドア

---

ヒカリは風の中にいた、大きな風の流れに身を任せながら、空をかけて行く。  
ヒカリが目を開くと下には見知らぬ世界が広がっていた。  
大きな滝が流れ落ち木々がジャングルのように生い茂っている。

『なんなのここ！？』

とヒカリが思った瞬間だった、ヒカリを運んでいた風が一瞬で消え失せ、ヒカリは地上に落下していく

ヒカリは気を失った。

ガサガサ

一人の黒いマントのような物を羽織った人影が、木々を掻き分け風を切り駆けていき、ジャングルを抜けると地面が大きな口を空け崖が広がっていた、崖のそばに人影は立ちなにかを待っているようにも見えた、マントの隙間から見える顔には少し幼さが残る青年の顔が見て取れる。  
大きなタカが羽音をたて飛んできて青年の肩に止まる、鷹から人の声が聞こえてくる。

『黒龍よ急げ西の国境の空に光が見える、風を失った光は、地に落下している見失うこと決してあってはならん』

ここから西の国境まで数百kmもある。  
青年が空を見上げると日が沈みかけジャングルの空が夕日で薄オレンジ色に染まりかけている。

『行ける』

青年は、心の中で静かに呟いた。  
鷹が飛び立った瞬間その後に青年の姿はなかった。

ヒカリが落下している空の下のジャングルでは、国境を監視している兵士たちが皆緊張した雰囲気  
気で国境を監視していた。

兵士といっても服装は粗末なもので兵士と言うより賊のようないでたちだった。  
そんななか、その場に馴染みようがないような少し背が低い赤毛の少年が同じく賊のようないで  
たちでいた。

彼の名前はジン

この国境を監視している兵達の副官だった。

ジンは軽い口調で兵士に声をかける。

「どうだ？国境は異常ないか」

「ヘイ、さっき強い風が吹き空に光が見えたんですが今は、消えてなくなっちゃいました」

「へーどの辺だい？」

「あの辺です」

ジンが兵士が指差した方を見上げると、空から黒い影が落下してくるよくよく見るとそれは人だ  
った。

「うそだろ！人が落ちてくるぞ！！すっげーなおい、このままだと地面に落ちて即死だ！！面白  
そうだ丁度退屈していたところだしオレがチョックラ見てくるわ！！」

ジンは興奮した声で言うと凄い跳躍力を見せ地面から一気に木に移ったかと思うと凄い速さでジ  
ャングルを駆け抜けていく、まるで獣のようだ！！

「国境には気をつけて下さいよ！！」

と兵士のこえが辺りに響いた。

ヒカリは、凄い速さで空を落下していた。  
ジンがヒカリを下から眺めている。

ジンがヒカリに狙いを定め飛びついた時だった黒い影がヒカリに急に飛びついてきた、反射的にジンはヒカリを自分の方へ抱えこみ、影を蹴りとばす、確実に何かに足がくい込み勢い良くけりとばした感触があった。

『よし！！に入った』

ジンがヒカリを抱え直しながら木に飛び移った瞬間、殺気と共にジンの左頬を短剣が霞める。

『やるな！！』

「誰だあんた、ユーリスの兵か？！」

「だったらどうした」

どこからか声が聞こえてくる。

「だったら諦めな、こっから先はラオスの領土あんたが国境を越えれば宣戦布告とみなし戦争になるぞ！！

知ってるだろう？ユーリスとラオスが睨み合ってることはどちらも機会を伺っている、また血を見ることになるぞ！！だからあんたも遠距離から攻撃してきてるんだろ！！」

「この女はおれの獲物だ！あんたにやるつもりわない諦めな！！」

ジンが言い終わるとともに殺気が消える。

「もの分かりがいいやつで助かった、この女を連れて勝てるやつじゃない、ユーリスの影が狙う女か・・・。」

ジンはヒカリを見た。

「変な格好の女だなあ？この辺の民族じゃないムイに見せてみるか」

ジンは来た道をヒカリを抱え駆けて行った。

ざわざわとした人の出す音でヒカリは目を覚ましゾツとした、勢いよく後ろに後退し驚きと恐怖で口をパクパクさせている。

『な・・・何よこれ、どうなってるの！！』

ヒカリは心の中で叫んだ。

それは仕方のないことだった。

むさい格好の血気盛んなヒゲを生やしたゴツイ男達がヒカリを囲いマジマジとヒカリを眺めて見せ物パンダ状態だったのだ、男達がヒカリを見る眼差しに耐えかねたヒカリは手で顔を隠す。

『なんなのいったい！！空の次は見せ物どうなってんの！？』

「おい、お前達女性に失礼だろ怯えさせてどうする」

突然落ち着いた口調の澄んだ男の声が聞こえてくる、男達は道を空けそこから一人の男の姿が現れた。

ジンより背が高く肩まで延びたまっすぐな銀髪が印象的だった、銀髪の男がヒカリをマジマジと眺めてから声を駆けてくる。

「申し訳ないねここの男達は女性に不慣れなもので」

と言うとヒカリを覗き込む、スルスルと絹のような髪が落ちその間から優しい瞳がヒカリを見ていた。

ヒカリは思わず頬が赤くなってしまった、こんな間近で男の人の顔を見たのは父親以外初めてだった。

『綺麗なお兄さんが私を見てる！！夜月先輩の顔ですらこんなに近くで見たことないのに！？』

ヒカリの表情が和らぎ肩から力が抜ける、彼の顔に見とれるあまりやっとな顔を上げたヒカリを見て銀髪の男は微笑だ。

「君の名前は？」

優しい声がヒカ리를包む。

「はっはい！！木ノ葉 ヒカリと申します！！」

とヒカリが緊張した声で言うと、銀髪の男はクスクスと微笑する。

「おい、お前達早く持ち場に戻れ！後ユキを呼んでこい」

鶴の一声で男達が散ったあと直ぐに女性が部屋に入ってきた、女性は一礼し銀髪の男に歩み寄った、とても綺麗な女性で長い黒髪を頭の上で結髪髪飾りを指している物腰が柔らかで品がある。

「お呼びですか」

女性らしい柔らかで品がある声。

「彼女の名前はヒカリ彼女をを頼む」

と一言言うと銀髪の男は部屋を出て行った。

部屋を出るとジンが扉の横で腕を組、壁を背に立っていた。

「どうだった？あいつ何者だ」

「私にも分からない、ここらの民でないのは間違いない髪の色が黒い種族はこの辺では珍しい、それにあの服装……。  
言葉は分かるようだがなんともいえないな」

「そうか、だがユーリスの影が動くぐらいだ何かある、あいつに報告するのか？ややこしいことになるぞ」

「もう遅いこの城では女は目立ち過ぎる」

「そうだなあ……」

ジンはさっきの男達の様子を思い出す。

「私は宴の用意をしてくる、ジンお前は警備を強化しろ影が彼女をさらいにくるかもしれない」

「はいよお頭、仰せのままに・・・」

とジンは軽い口調で言うとその場から立ち去った。

ジンが立ち去った後の殺風景な廊下を眺めながら、銀髪の男は静かに呟いた。

「やっと世界が動きだしたか・・・。」

ヒカリは、ユキに連れられるまま城の客間らしき部屋につれてこられ

眠っている間に何故かスカートの裾が破れ泥だらけの服を着替えさせられた。  
なんだか遊牧民族の服のような感じの衣装で、とても軽くいい匂いがした。  
髪もユキが上手く結び上げてくれた。

「ハイ、出来ましたわヒカリ様」

「様は辞めて下さい、私そんなに偉くないです。」

様を付けられるだけでなんだかむず痒い感じがした。

「とんでも御座いません、あなた様はとても大事なお客様です  
だからムイ様も私をお呼びになったのですよ」

ヒカリはどうやら客人扱いされているようだった。

『あのムイさんていうのかぁ・・・。

てっそんなこと考えている場合じゃなかった。』

「ユキさん！！」

「はい、ヒカリ様なんですか？」

「ここはどこなのでしょう？私が知っている限り私の世界にはこんな国ありません  
でも、言葉が通じているのも変で・・・。」

突然のことで頭が動かずにいた、ヒカリはやっと自分の状態を気にかける余裕ができた。

ユキはにこっと笑い、不安そうに自分を見上げる少女を自分の体の方へ抱きよせた。

「怖かったですでしょう・・・  
でも、もう大丈夫です、私がこの世界の事をお話しさせていただきます。」

ユキからはなんだか懐かしい匂いがしてヒカリの心を落ち着かせた。

「この世界は7つの大陸に別れていて全体をセブズドアといいます。  
今ヒカリ様がいるこの国は、ラオスといって鉱山が多くあり採鉱が盛んな国で鉱石を近隣の国に  
売ることによって利益をえています、この城はラオスとユーリスの国境を監視するための城なのです。  
今、ラオスとユーリスは睨みあいどちらも攻め入る隙を伺っています。」

「何故、ラオスとユーリスは戦争を？」

「水です。  
ラオスは鉱山はありますが川がありません、小さな湧水でできた湖が大小合わせて4ヶ所あるだけ  
なのです  
湖は国が管理し民は水を買うために仕事をし貧しい暮らしをしています、湖が濁ってしまったら  
この国は終わりです  
ラオスの王は水を求め水の国ユーリスを配下に収めようとしているのです。」

ヒカリは顔を曇らせた。

「やっぱりここは私の知ってる世界ではないみたいです。」

「ヒカリ様……。」

ユキはヒカリの手を取り

「元気をお出し下さい。」

ほ、ら窓の外に今日の宴の主役が参りましたよ」

ユキに言われるまま窓の下を覗くと、そこには大きな荷馬車を囲み彩りどりの衣を纏いヒカリが  
見たこともない動物達を連れた一行が城の門を潜り抜けてくる。

「あれは？」

「はい、今日は本城から視察の物が参りますので、宴の席の花として呼ばれた芸者の一座ですわ  
」

この世界のサーカスみたいなものかなあとヒカリは思った。

「でもなんだか楽しそう」

「ヒカリ様喉は乾きませんか？」

「でも、お水は・・・」

「心配なさらないで下さいここは見張り台とはいえ城水の蓄えがあります、それに湖も近いですから  
ここにお持ちしても良いのですが、ヒカリ様が不便なよう一度案内させていただきます。」

「ありがとうございます」

「では参りましょ。」

ヒカリはユキの後を歩いた。

ユキの歩き方はとても美しかった、立ち振る舞い身のこなしなどなぜかどこか日本舞踊を思い出させた。

2階に降りる階段前でユキは急に立ち止まった。

ユキは困った顔で

「少し遅かったようですわ」

階段から下を覗くと芸者の一座の人々が長旅で渴いた喉を潤そうと、水飲み場に長蛇の列が出来ていた。

「ヒカリ様はここにいて下さい。  
私が行って係の者に水を分けて貰って来ますので」

と言うとユキは階段を降りていった。

「はー・・・。」

ユキが見えなくなるとヒカリはため息をついた。

『私どうなっちゃうんだろ・・・！？  
見知らぬ世界で一人ぼっち右も左も分からなくて不安だけど  
でも、ここにいれば先生や先輩達に合わなくてすむし周りを気にして心を痛めなくもいい  
なんだかほっとしている自分がある・・・』

ヒカリの頬を風が優しくなぞる  
ヒカリが何気なく後ろを振り向くとそこには、窓があり雲ひとつない青空が広がっていた。  
窓の外から女の子の声が聞こえてくる。

「ココ降りておいで！！」

窓の外を見ると木に子猫がしがみ着いている。  
女の子が下から声をかけるが怖がりいっこうに降りる気配がない

その光景をみたヒカリは、自分に気合を入れるように

「よーし！！」

と大きな掛け声の後腕枕をし、着ている服のヒラヒラした部分を縛り窓に足をかけ身を乗り出すと

木に向かって大きく手を伸ばした。

木は窓から少し離れたところに立っており、手を伸ばせば届かない距離ではなかったが怖がる猫は思うように捕まえことが出来ず逆に身を屈め丸くなってしまう。

「お姉ちゃん頑張って！！」

下から女の子の声援が聞こえてくる。

「うー！！もうちょっと」

手をこれでもかと言うぐらいに少し勢いを付けて身を乗り出した瞬間。

「きゃー！！」

と女の子の悲鳴が辺り響く。

ツルンと足元が滑り体が急にグラッと前に傾くと、とっさに近くにあった木の枝を掴むがヒカリの体重を支えきれずバキバキと音を立てて折れてしまった。

枝がおれたことにより子猫もまきぞいをくらいヒカリと共に地面に落下するはめに・・・

ドスンという物が落ちた衝撃音が辺りに響く。

「いたたた！！て、あれ痛くない！！

あんな高さから落ちたのに！！」

ヒカリは不思議に思い、自分の体を見渡しお尻の下を見た時だった。

お尻の下には無惨にもヒカリのお尻に押し潰された少年の姿があった

ヒカリは少し不思議そうにその少年を見つめた。

「大丈夫・・・ですか！？」

と恐々声を掛けると

「この状況で大丈夫なわけあるか！！

ぼけっとしてないで、ささっとどけよ重いんだけど」

と言われたとたん状況を理解しヒカリは少年から飛び降りた。

「御免なさい、下に人がいたとは思わなくて」

慌ててヒカリが謝ると、少年は地面に打ち付けたお尻を擦りながらゆっくりと立ち上がった。

「きーつけるよなあ、

本当お前落ちるの好きなんだなあ」

ヒカリははっとした。

「もしかして、私をここまで運んでくれたのはあなたなの？」

「そうだけど」

とそっけなく少年は答える。

「助けてくれてありがとう。私、木ノ葉 ヒカリあなたは？」

「ジンだよ、よろしくなヒカリ」

ジンは、輝く太陽のような力強く暖かい笑顔をヒカリに向けた。

その笑顔を見てヒカリは少し嬉しくなった。

向こうの世界にいた時は、ヒカリに笑顔を向けてくれる人は少なくなっていたからだ。

自分がみんなにそうさせていることがヒカリには分かっていたが、どうすることもできなかった。

ジンは、ヒカリと同じか少し低いぐらいの身長で自分で切っているらしく髪はザンバラ髪で色はオレンジ色

澄んだ青瞳をしている顔を付きはヒカリより幼く見えた。着物を紐で潜り付け上の部分は後ろに垂らしている。

「こちらこそよろしくね、ジン君」

とヒカリが声を掛けると少しジンの顔が険しくなる少し強い口調で

「お前オレのこと年下だと思ってるだろう！？そういう思い込みはいけないぜ  
いつか足元救われるぞ！！

目に見えている物が真実とは限らない覚えおくように、オレのことはジンと呼べ」

と胸をはり偉そうに言った。

その光栄をみて、ヒカリは少しおかしくなりクスクスと遠慮がちにに笑った。

二人のやり取りが終わるのを待って、女の子が子猫を抱えて近づいてくる。

木から落ちたさい子猫はうまく自分で地面に着地したらしく無事だったようだ。

ペコリとヒカリに頭を下げて

「ありがとうお姉ちゃん」

と元気よく言うと駆け足で去っていった。

「ヒカリ様！！」

と透き通った声が聞こえてくる。

ヒカリを見て安堵した表情のユキがヒカリにかけ寄ってきた。

「探しましたよ！！

ヒカリ様どこに行ってしまったのかと心配しました！！」

息をきらしヒカリにユキはしがみ付く

「御免なさいユキさん心配かけて」

その様子を見たヒカリはとても申し訳なく思った。

「いいいのです。原因は分かっています！！」

と言うとユキはジンを睨み付けた。

「オレ！？」

とジンは呟き不服そうな顔をする。

「トボケテもだめです！！  
いつもいつも私の邪魔ばかりして！！  
何も分からないヒカリ様を連れだしたのでしょ！！」

「オイオイ、失敬だなあ、オレがいつお前の邪魔をしたよ！！」

ジンも反論する。

「シラを切るおつもりですか！！  
あなたのお腹に聞いて見なさい、私が今朝ヒカリ様の為に作ったお饅頭が無くなってしま  
したよ！！  
あなたでしょジンさん！！」

印籠をつきつけられジンの顔色が急に変わる。

「ばれたか・・・！！  
だって食べてくれと饅頭が俺に助けを求めてきたんだよ  
困ってるやつを助けないのは男がすたるってもんよ・・・」

と慌ててわけ分からないいい訳をする。

「なにを偉そうにただの盗み食いではないですか！！」

まだ、鼠のほうが可愛いわ！！」

とユキが止めを刺す。

いい訳が思いつかないジンは

「うう……」

と黙り込んでしまった。

『ユキさんお見事！！』

ヒカリはユキの意外な一面をみてきょとんとしてしまい  
まあまあと二人をなだめるので精一杯だった。

ゴーンと鐘の音が城内に響き渡る。  
ジンの表情が曇る。

「やっと来たなガゼルのやつ一時間の遅刻だいいきなもんだ  
おいユキ、ヒカ리를連れて中央の間に急げ宴が始まるぞ」

ユキの表情が険しくなる。

「それは、ヒカリ様も宴に出席しろと言う意味ですか！？何故ですヒカリ様は客人のはず」

「仕方ないだろお頭の命令だ」

とジンはそっけなく言った。

「わかりました。」

とユキはヒカリの方へ振り帰り

「急ぎましょうヒカリ様」

とにこっとヒカリに笑って見せた。

「おいユキ、ヒカリから目を離すなよ」

とジンがユキに忠告するのを聞いているのかいないのか、そのままヒカリを連れてユキは城内に消えていった。

闇が潜む夜。

---

城内は宴の仕度でざわめいていた。  
ユキはヒカ리를奥の室に連れて行くと

「お召し変えをヒカリ様そのお姿では宴の席には着けませんわ」

ヒカ리는自分の衣装に目をやった。  
ところどころ破け泥が付いている、落ちたさいに破いたらしい  
ユキは、手慣れた様子でヒカ리의身仕度を整える。

「ハイできました。」

「ありがとうユキさん」

ユキは真剣な顔でヒカ리를見た。

「ヒカリ様、宴の席では決して立ち上がらないで下さい、何が起ころうとも」

ヒカ리는、ユキの表情がとても真剣でおもおもしろかったため息を飲んだ。

「分かりました。」

とヒカ리는頷いた。

「では参りましょ、私に着いて来て下さいませ。」

ヒカ리는ユキの後に着いていった。

宴の会場は、城の中心にある中庭だった56段の雛壇のような物に真紅の絨毯が敷かれている  
二人はその雛壇の左側の端に腰を下ろした。

日も暮れはじめ空が赤く染まると会場内に日が灯される

ジンとムイはヒカリ達とは逆の位置に座っている

ゴーンと重い音が会場に響くと一人の少し中年太りで身なりの良い男と家臣らしい二人を引き連れて入ってきた。

それを見た会場にいる者全てが頭を下げた。

ヒカ日もそれに習う。

「良いおもてを上げよ」

と中年太りの男が言うとみな顔を上げた。  
この男がジンが言っていたガゼルのようなだった。

「久しいなムイ、城に変わらないか？」

「はっ、変わりなくユーリスに動きもありません。」

「そうか、今回は城の視察も目的だが今度城で開かれる花見の下見もかねているのは、知っているであろうなあ。」

「はっ、この辺りで一番の花をご用意しております。」

「ほー、それは楽しみじゃはよう初め。」

ムイが、手を上げるとゴーンと重い音が会場に響いたと思うと綺麗な笛の音や琴のような音が聞こえてきた。

色とりどりの衣装を身にまとった踊り子が会場内を蝶のように舞い踊る。

「キレイ！！」

ヒカリが踊りに見とれていると

どこからか仮面を付け矛を持った踊り子が現れ、舞を踊りながら矛を振るう。

技が決まると会場内から歓声が上がった。

その時だったクロ待ちなさいと、止める主人の静止も聞かず会場の裏手から見覚えある子猫が歓声に驚いたらしく一目散に壇上めがけて突進してくる。

驚いた踊り子達は、踊りをやめ子猫を捕まえようとするが子猫はそれをすり抜け壇上に上がって行き壇上の真ん中に座っていたガゼルの顔にとびつき顔を思いつきり引っ掻いた。

「ひー！！」

と情けない叫び声が響く。

家臣も突然の出来事に呆然としている。

ガゼルは顔にぶら下がっている子猫を自分ではぎとると地面に叩きつけた。

「キャ！！」

と小さく子猫は悲鳴を上げ動かなくなった。

その様子を見ていた主人の女の子が猫に掛けよってくる。

「クロ!？」

女の子は猫を抱き抱えあまりのショックに座りこんでしまった。

「お前が買い主か、宴を台無しにした罪は重いぞ」

と凄いい剣幕で怒鳴りちらすと腰ある剣を抜き、ガゼルは女の子見下ろしている。ジンが止めに入ろうと身をのり出そうとした瞬間、ジンをムイが止める。

「辞めておけジン、アリア様がどうなってもいいのか堪えろ。」

ジンは座り直し、ガゼルを睨みつけ拳を握りしめかろうじて耐えていた。女の子に剣が勢いよく振り落とされる。誰もが少女の首が、床にゴロリと落ちるさまを想像し目を伏せた。

「駄目!!」

と誰かが叫ぶと同時にカンと金属音がする。みなが顔を上げるとヒカリが女の子を抱え地面に転がっている。ザワザワと会場がざわめく

「何てことを」

ムイが呟き。

「ヒカリ様」

とユキが叫んでいる。

恥をかかされたガゼルは和を駆けて怒り狂う。

「小娘わしに逆らうきか!!」

目の前で首を跳ねられる女の子を見てとっさに飛び出したのはいいが、ヒカリはあまりの恐怖に女の子を抱きかかえ動くことができない。足や腕がガクガク恐怖で悲鳴を上げている。

ガゼルはヒカリの前に立ち

「ワシに逆らうとどうなるかおもしろい！！」

と今度はヒカリの首めがけて剣を振り下ろす。  
嫌な鈍い音がし床にゴロリと首が落ちる。

『あれ！？』

ヒカリは自分に起きた異変に気づく。  
目を空け顔を上げると首がない人間の体が血渋きを上げながら力無く倒れこむヒカリの目の前が  
血で真っ赤に染まる。

恐怖で声が出ない……。

ヒカリのすぐそばにガゼルの首が転がっている。  
ヒカリは目の前で起きている現実を拒否する。

「なあなあ・何！！どうなってるのイヤー！！」

自分が助かった安堵感より目の前で起きた悲惨な出来事に悲鳴を上げた。

「ジンなんてことお！！」

ムイが頭を抱える。

ジンは刀を持ちその場にボーゼンと立ち尽くしていた。  
ポトポトと剣先から赤い液体が流れ落ちる。

「もーたくさんなんだよ！！  
罪もないやつが死んでいくのは！！宴、ただの狸の憂さ晴らしだろ  
何故、毎回血に染まる！？」

ジンは顔を上げムイを見て

「なあムイ、なぜなんだ……」

「ジン・・・」。

ムイの表情が曇る。

「お前が話さないならオレが言ってやるよ！！  
視察とは名ばかりで、オレたちから家族を人質に取って俺たちを縛りつけている  
オレ達に圧力をかけるために、こうやって意味のない殺戮を繰り返す  
逆らうな次はお前らだぞってね  
オレ達は何人罪の無い者を見殺しにしてきた  
もーオレは沢山なんだよ！！」

と言い終わると急に地面に崩れ落ちた。  
自分でも何が起こったのか分からない背中に嫌な痛みが走る。

ヒカリはとっさに女の子を地面に寝かせジンにしがみつく。

「ジン！？」

ジンに触れた手には、ベツトリと赤い血が付いた。  
ジンの背中には矢が刺さっていた。

「何、何がおきてるのジン、ジン起きてよジン！！」

ヒカリの声会場に響く、会場が騒然となる。

そんな騒ぎのなか壇上からクスクスと不気味な笑い声が聞こえてくる。

ムイが声がる方へ視線をやると、さっきまでガゼルが座っていた席に派手な着物に身を包んだ男が座っていた

長い癖がある髪の間からゾクッとするような綺麗な顔が覗く。

「あなたは！？」

「私は王から命令を受けあそこで転がっている男と視察に来たもの着いて来て正解だったよ面白い物が見れた」

「何！！」

ムイが殺気立つ。

「おーこわい、そんなに殺気立つなよ」

「あの矢はお前が！？」

「さーね、でも視察の際には何人か忍のものがくるはずだ  
こういうことがあるからね。

この城の騒ぎもすぐに首都におられる王の耳に届くだろう  
さあどうする？」

「どうするもない、私にとってジンが全てこうするまでさ！！」

と言い終わると地面に何かを叩き付けた。

パリンとガラスが割れる音がするが会場の騒がしい音にかき消され、みなは気づかない。

「そうまでして守るのか・・・。」

と言うと彼の姿は闇に溶け込む様に消えてなくなった。

会場の明かりが急に吹いた強い風によって消える。

日も沈み辺りは真っ暗になった。唯一月の光が会場を照らす。

「明かりが！？闇がくる何故だここには守りの陣が張られているはず！！」

「まさか！？陣が破れたのか！！」

と騒ぎだすものやガタガタと足を震わせ座り込むもの  
みな何かに怯えだした。

『血が止まらない！！』

ヒカリはジンにしがみ着いたまま、まだそのままだった。

『なんだろう？みんなの様子が変わりだ何かに怯えているよう！？』

月明かりでなんとか周りの様子を確認することはできた。  
周りを見わたした後、下のジンに目をやると様子がおかしかった手足が黒くなっている。

「嘘なにこれ！？」

よくみるとジンの足が黒く変色しているのではなく、地面から黒い幕のような物がジンの体を飲み込むようにまきついてきていた。

「嫌！！ジンいかないで」

ヒカリの周りにも闇が集まって来ていた。

「私しに近づかないで！！??」

ヒカリは恐怖のあまり混乱し闇から逃げようと走り出した。  
闇は獲物をジワジワ追い詰めていく会場の壁がヒカリの行く手を阻む。  
これ以上逃げられない、会場にいたヒカリ以外の人々は闇につかまり飲み込まれていく。

地獄絵図のような光景だった。

『何で私がこんな目に！！  
私はこの世界の人じゃないのよ！？  
私は関係ないわ  
来ないでよ  
お父さん、夜月先輩助けて・・・  
助けてくれるわけないよね私は皆を裏切ってここにいる  
私にはお似合いの最後なのかも・・・』

ヒカリは自然と目を閉じた。

「諦めるのか？」

誰かの声がする。

「誰！？」

目を開けると黒いマントを羽織った男がヒカリと闇の間に立っていた。

「女、問の答は？」

「えっ?!」

ヒカリは答と言われてもピンとこなかった。

男は強い口調で言った。

「死にたいのかと聞いている！？

死人に要はない、お前みたいなちんけな女が死んでもオレには関係ないけどな！！」

とヒカリを挑発する。

ヒカリは何だか腹が立ってきた。

「何よ！？あんたに私の何が分かるのよ！まだ一杯やりたいことが山ほどあるんだから！！

こんなところで死んでたまるか——！？」

ヒカリは自分口を押さえる。

「えっ?!」

自分でもビックリした。

『こんな言葉が自分の口からでるなんて、いつも押さえていた自分、本当の自分！！』

「へー言うじゃないか」

というと男は、刀を抜き何故か自分の手首を切った。

刀はとても切れ味が良く少しはが肌に触れるだけで手首から血がひたたり落ちる。

男は自分の血を刃先に塗り付けるとその刀で襲ってくる闇を切る。

風にマントがなびく実態のない闇が切られていく、闇は男を恐れているようにも見えた。

ヒカリは息を飲む恐ろしくて声も出なかった。

『この人凄い！！』



男は闇を払うと

「ライラ！！」

と叫んだ。

すると大きな白い毛の狼に良く似た獣が姿を現す。

「月下様お呼びですか」

「その女を連れて逃げるぞ！！女こっちにこい」

と言ってさっきまでヒカリがいたほうへ振り向くとそこにヒカリはいなかった。

「ジン！！」

ヒカリは闇を恐れることなく闇に飲み込まれていくジンの方へ走り出していた。

闇はヒカリを避けるように道を開ける。

闇を掻き分けジンを闇から引きずり出す。

だが、闇から姿を現したのは豹のような獣に姿を変えたジンだった。

背には矢張やがささっている。

「ジンなの！？」

その姿を見たヒカリは混乱する

「ジン！！」

少し遠くの方からジンを探すムイの声が聞こえてくる。

「ムイさん！！」

ジンの瀕死の姿を見たムイがジンに駆け寄ってくる。

「ヒカリ、ジンの様子は？」

「それが・・・。」

ヒカリは獣に視線を下ろすと矢が刺さっているおかげで出血は少ないが、  
かろうじて息をしている感じだった。

「ジン！！しっかりしろ！！」

ムイが獣に叫ぶ。

「やっぱり、ジンなんですか？」

ヒカリが聞きかえそうとしたときだった。  
体が何かに引っ張り上げられる。

「うわぁ！？何??」

「話しこんでいる時間はない！！」

ヒカリを軽々と片手で持ち上げたまま月下が言った。

正面から見た月下は、細身ながらたくましい体つきの青年で短く切った髪の色は黒  
ヒカリより少し背が高く少し幼さが残る顔に緋色の瞳がとても印象的だった。

「下ろしてよ！！」

ヒカリがジタバタと暴れる。

「お前死にたいのか！！ここはすぐに闇に吞まれる  
そうになったら俺にもどうすることもできない！！」

よりいっそう暴れながらヒカリは

「嫌よ！！ジンを置いては行けないわ！！  
ジンは私の命の恩人なのよ！」

「俺がそんなこと知ったことか！！」

ヒカリを無視して月下が後ろに振り返った時だった。

「私からもお願いするユーリスの影よジンだけでも連れていってくれ」

すがりつき頼むムイの姿を見て月下は・・・。

「男が敵に簡単に頭を下げるな情けない！！」

とムイを軽蔑したような目で見ると。

「どう思われようとも私にとってジンは全てだ！！  
今下げずしていつ下げる！！  
私にここまでさせたのだ約束は守ってもらうぞ影よ！！！！」

その気迫に満ちた言葉を聞いた月下は

「いや、さっき言ったことは取消  
こいつは責任を持って俺がユーリスに連れていくこれでちゃらだ」

と言い終わるとヒカ리를ライラの背に乗せジンをヒカりにほうり投げた。  
ヒカりは慌ててジンを受け取る。

「ちょっと危ないじゃないジンはけが人なのよ！！」

とヒカ리가抗議する。

「キャンキャンうるさいと、ほっていくぞ女」

「何よ！！」

「行くぞライラ俺に続け！！」

月下はヒカりを無視して走り出した。

「ちょっとムイさんは！！」

「定員オーバーなんだよ！！」

月下とライラは壁を軽々と乗り越えるとジャングルの木々を避けながらグングン進んで行く  
ヒカりはあまりの速さに目を開けることが出来ず息をすることがやっとだった。

急にライラが立ち止まった。

そこには大地が大きな口を開け行く手を阻む、夜で暗いせいか底が見えず、よりいっそう深く見えた。

向こう岸まで距離があり人や獣では飛び越えることが出来ない。

「凄い崖、落ちたら即死だ!？」

ヒカリが崖に気を取られていると

「行くぞ!!」

と月下が言うと同時にライラが走り出す。

「嘘でしょ!飛び越える気なの!？」

月下とライラは迷う事なく崖に突っ込んでいった。

ヒカリはジンを抱えながらライラにカー杯しがみつく。

「誰かこの男を止めて!!」

ヒカリが声にならない声で叫ぶ。

風圧で服が波をうつ

「何!!私飛んでる!？」

と思った瞬間体が下に傾き、引力に引っ張られ落下していく。

「嘘でしょ!!こんなところで死ぬのはいやー!!」

とヒカリが叫ぶ。

もうだめだと思い覚悟を決めたときだったライラが何かに着地した。

「助かったの!？」

目を開けて周りを見ると今度こそヒカリは風を切り空を飛んでいた。

「どうなってるの!？」

自分達が乗っているものを確認しようとするが、大きすぎて確認することができなかったがバタバタと羽音がする。

大きな鳥のようだった。

「凄い私飛んでる!!」

月明かりで見る夜空はとても美しいかった。  
星は輝き月明かりで浮かび上がる雲はとても神秘的に見えた。  
空を飛んでいるせいか夜風は冷たく吐く息は白い。

「寒い、何だか眠くなってきた・・・。」

安堵感と疲れからヒカリは眠りに落ちた。

空が朝日で赤く染まるころ地上には、水路に囲まれた水の都城ユーリスが見えてきた彩りの花が  
咲き乱れ  
建物全体は白い壁で出来ていて都の中央にある城らしき大きな建物を囲むようにして町が広がっ  
ている。

バタバタと大きな音を立て都の裏門の近くの茂みに何かが降り立つ。  
茂みから月下達が姿を現すと裏門から一人の男が出てきた。

「よ一月下、やっと帰ったか  
夜どうし待ってたんだぜ、日が登って来たんでヒヤヒヤした。」

と月下に声を掛ける。

男の名前は 浪 大河 ( ロウ タイガ )  
月下より五つほど年上で背が高くガッチリした体格、  
髪はボサボサで寝癖が着いている月下とは違い不思議な落ち着きがあり。  
月下にとっては優しく厳しい兄貴といった感じだった。

「どこが心配していた奴の格好なんだよ、頭 寝癖が付いてるぞ」

「おっといけねえ・・・ばれたか」

と大河は慌てて髪をクシャクシャと直す。

「満月が近いこの時期に危険を犯してまで探しにでた収穫はあったみたいだな」

ライラの背で眠っているヒカリを見ながら大河が言った。

「女はいいとして、その重症の獣人はなんだ？それに闇に犯されているみたいだが？」

「拾ってきた、すまないがこいつを城に連れててて手当をしてやってくれ手遅れになるまえに・・・」

「キリコ様がちょうど城に来ている。  
ライラ屋敷に二人を連れて行き手配してもらってくれ頼んだぞ。」

と言われるとライラはヒカリ達を乗せて裏門に入っていき姿が見えなくなる。  
大河が月下に歩みよる。

「月下、手首を見せてみる。」

大河が乱暴に月下の左腕を掴む  
手首にはさっき刀で切った傷跡からまだ血が滴り落ちている。

「あれほど血を使うなといっただろう暴走したらどうする！早く血止めを」

と大河が言った時だった。  
月下の体が力なく大河の体に倒れ込む、息も荒く体がだるい。

「力の使いすぎだ今は休め月下・・・。」

月下は深い眠りに着いた。

あしがき。

---

初めまして、モカといいます♪

月のヒカリⅠを読んで頂きありがとうございます。

一年前からコツコツ書いていた作品なのですが、少し書き溜まってきたので恥ずかしい気持ちもありながら

勇気を出して掲載してみることに。

つたない文章で申し訳ないです。

イラストを今回導入したのですが、やっぱり表紙はカラーがいいですね。

今回画面がとっても暗い！！

カラーイラストができれば差し替えたいな◎

イラストの評判がよければ挿絵も考えようかなあ。

と楽しんで作っております。

お話は、まだ書き溜めたものがあるので編集が終わり次第up予定です。

ご意見感想お待ちしております！！

モカ